

目 次

絵画の構図分析にコンピュータを使用する	1
アートドキュメンテーション研究フォーラムからはや一年	8
フロッピー入稿	9
【歴電】クロニクル	12
ニューズレター原稿募集	15
その他	16

絵画の構図分析にコンピュータを使用する

学習院大学 片桐頼継

1. はじめに：ルネサンス絵画の造形言語

私はルネサンス絵画を研究しており、絵画作品の構図を分析し、画家がどのように絵画空間を構成していったのかを明るみにしたいと思っている。写実絵画を目指したルネサンスの画家たちは、三次元空間を視覚的に再現／表現する一方法である透視図法の開発に取り組んだ。もとより、透視図法を用いただけで芸術的な作品が出来上がるわけではない。やはり画家の芸術的資質が最重要条件である。とはいえ、小説家が確固たる文法や修辞法に基づいて言葉を語るように、画家たちも然るべき造形言語を用いる。当時の画家たちにとって透視図法はいわば文法だったのである。ただし、画家たちは基礎文法に則りながらも、各々独自の語り口で絵を描く。したがって透視図法の適用にも個人差や個性が反映される。そこで私は、透視図法を軸として構図分析を行なうことにより、画家の語り口の特徴を探ろうと考えた。その際、コンピュータの画像処理機能を利用するが、具体的にどのような作業によって、どのような問題を扱い、何を見い出そうというのか、その一例を紹介させていただく。

ちなみに、私が使用している機器は Macintosh とスキャナー、ソフトは主に Super Paint である。分析結果のプレゼンテーションには Illustrator や Photoshop を用いるが、作業の大半は Super Paint による。もとより、準備段階では、やはり紙と鉛筆を用いて作業し、それをスキャナーで取り込んでモニターでシミュレートする。

2. 具体例：レオナルド・ダ・ヴィンチ作「三博士礼拝」図の構図分析

例として、レオナルドの「三博士礼拝」図という板絵（1481年、縦243cm、横246cm、フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵）の構図分析について述べたい。なお、この研究は平成3年10月に美学会全国大会で口頭発表、『武蔵野美術大学研究紀要』（No.22、1991年）で論文発表したものである。

この板絵では、手前に群像が、背景に建造物が描かれている。また、厳密な制作姿勢をモットーとするレオナルドは、板絵の制作過程で、背景の建造物のための素描（縦16.3cm、横29cm、ウフィツィ美術館、素描・版画室蔵）を、然るべき透視図法の手続きに則って用意している。そこで私は、この素描と板絵を見比べながら、レオナルドが素描の段階で構想を練り、それを板絵に導入する過程を追ってみようと考えた。

そうこうするうちに私は、建造物のイメージが、素描と板絵とでは微妙に異なっていることに気づいた。素描でも板絵でも、建造物の基本的なデザインは同じだが、わずかに視点のズレが生じているのである。ではそのズレは何を意味しているのか。

3. 視距離：絵画空間を構成する際の基準点

透視図法を用いる画家は、原則として、対象物と自身の位置関係、すなわち目の前にある建造物を画家がどれくらいの距離から眺めているのかを想定し、それを作図の際の基準にする。これを「視距離」と称する。私は、初見から、板絵に描かれた建造物と素描に表わされた建造物との間に、視距離の相違があると推測した。そしてそれを確認するためにコンピュータでシミュレーションを試みた。

4. 作業：画像処理の手続き

(1) 建造物の基本構造を単純な幾何学的形態に還元した略図をつくる。

この建造物には二つの階段がある。顕著な特徴である。そこでその階段を抽出し、踏面と蹴込みを省略した単純なイメージ（スベリ台のような形態）に還元する。この段階では、素描に表わされた階段と板絵中のそれを別々に略図化する。まず紙と鉛筆で元図を作り、その際に消失点と階段の位置関係のみを扱った線画を作図するが、この作業は慎重に行なわれる。不正確な図を作れば、後続のシミュレーションはすべて誤りもしくはウソになるからである。

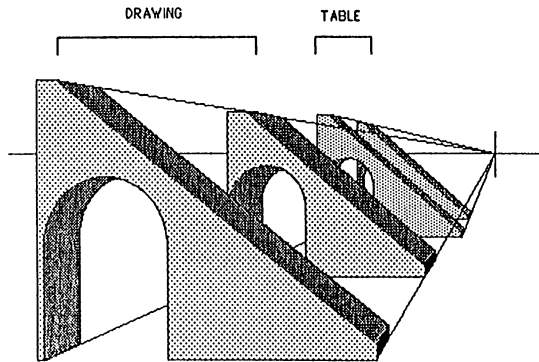


図 a

- (2) (2)上の作業で作られたそれぞれの略図をスキャナーで読み込み、Supre Paint を使用して、同一の透視図法プランの上に乗せ、視距離の相違を検証してみる (図 a)。手前の二つが素描中の階段、奥の二つが板絵中の階段である。この図によって、両者の間で視距離が異なっているのが分かる。つまりレオナルドは、素描の段階では階段をやや近くから眺め、板絵の段階では、素描の場合よりもやや遠くから階段を眺めているのである。
- (3) 板絵の写真をスキャナーで読み込み、作業に必要な細部を消去する (図 b)。ここでも Super Paint を使用する。陰影のトーンはつぶれてしまうが、シミュレーションにはこれで十分である。必要なのは構図の枠組みであり、個々のモチーフは省略して作業目的を明確にする。

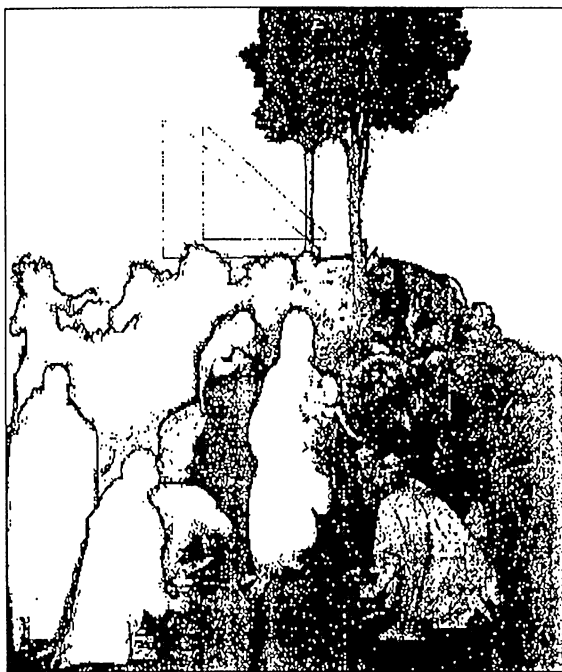


図 b

- (4) 図 b が表示されたモニターに図 a を流し込み、縮尺を調整して、階段の略図を板絵の画面に張り付ける (図 c)。

各図を Drawing ツールで入力して安定させ、Paste モードを Transparent にし、a, b いずれかの図をドラッグして他方に重ねる。その際、板絵中の階段の略図を、本来の板絵の背景に描かれた階段の位置と大きさに合致させる。もし板絵の画像と略図が合致しなければ、上記 (1), (2) の段階での作図が不正確だったことになる。その場合は作業を (1) からやり直す。骨の折れる作業だが、それを怠って (4) の段階で適当に画像を修正してつじつまを合わせるのは厳禁である。それは研究においては明らかな不正行為である。シミュレーションよりもプレゼンテーションを優先してはならない。

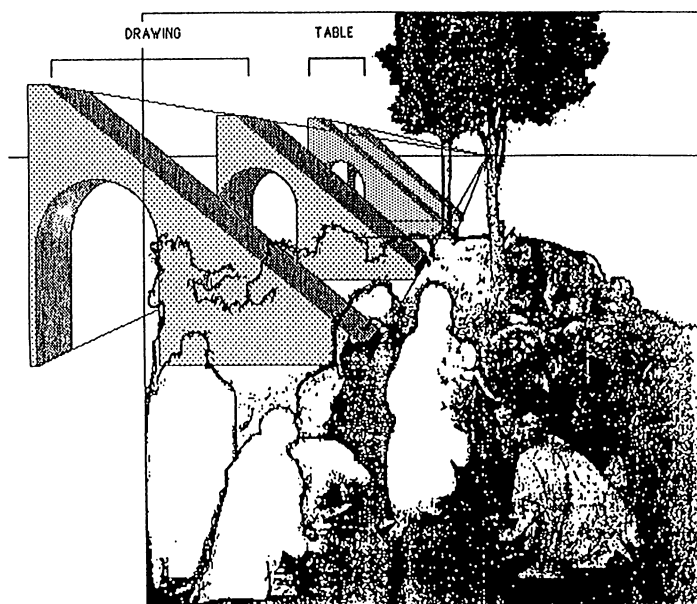


図 c

5. 作業結果：シミュレーションから何が読みとれるか

さて、図 c を見ると、画面の前景すなわち聖母子と三博士および周囲の群衆からなるスペースに、手前の二つの階段が割り込んでいるのが分かる。すなわち、素描中の建造物をその設定のまま板絵に導入すると、階段部分が前景の群像のかげに隠れることになる。この建造物は、ローマ帝国の崩壊とキリスト教世界の始まりを象徴する重要な役割を担っており、また、素描の段階でこの建造物が実に入念に練られていることから、レオナルドはこのモチーフを重要視していたにちがいない。したがって、できれば建造物の全容を板絵に表わすことが望ましかったはずである。そこで私が推測するに、草稿を板絵に導入する際にレオナルドは、建造物が隠れないように、もう少しそれを奥の方に後退させるべく、視距離を設定し直したのではないだろうか。もとより、建造物をそのまま適当に縮小して画面に収めても、全体の構図にはさほど支障はなかっただろう。だが、それでは前景と後景の空間に歪みが生じる。やはり絵画空間を厳密に規定しようという彼の姿勢が妥協を許さなかったのではないだろうか。

結び

これまで、この板絵とその背景素描の関係が深く論じられることはなかった。建造物のデザインの類似から、素描と板絵の帰属関係はすでに明らかであり、もはやそれから先の問題が扱われることがなかったのである。だが、板絵と素描の関係を視覚的に再検討することで、両者の間に、制作過程というコンテキストが生まれ、そこから、制作途上でレオナルドが何を考え、いかに問題を解決していったかというダイナミックな分析が始まる。

コンピュータの使用はこうした分析作業に適している。入力する材料を準備する段階は手作業だが、異なる画像を同一の視覚空間で重ね合わせるといったシミュレーションではコンピュータが威力を発揮し、データを保存して何度でも速やかに試行錯誤を繰り返すことができる。こうした作業を手仕事で行なう状況を想像すると気が遠くなる。研究者が繁雑な作業から解放されて自由な発想の機会を得る上で、コンピュータが一助となっていると実感する。

上記の作業に基づいて私が提示した解釈は所詮一つの仮説にすぎない。が、芸術学の分野に唯一絶対の正解はない。むしろ新たな視点とアプローチを開拓することに意義がある。またコンピュータが自動的にそれを可能にしてくれることはないし、コンピュータに任せておけばおのずと何らかの解釈が出てくるわけでもない。やはりあくまで研究者が主体性をもって研究にあたらなければならない。

.....

第1回アート・ドキュメンテーション研究 フォーラムからはや一年…

東京国立近代美術館 水谷 長志

昨年の11月18-19日の二日間にわたって、アート・ドキュメンテーション研究会は国立国会図書館との共催により、同館新館講堂と地階展示室において、第1回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム「美術情報と図書館：Art Information and Library Services」を開催しました。本誌編集部よりその報告を書くように言われ、あれからもう一年が経とうとしているのだと、あらためて時の過ぎ行く速さに驚いています。

この原稿は10月29日に書いているのですが、昨年の今ごろ何をしていたかと去年の手帖をひっぱり出すと、展示室でおこなった「日本における美術書の流れとマルチメディア」に必要な関係資料を借用するため、慶應義塾大学や図書館情報大学、横浜美術館などへ借用の依頼状を出したり、実際に資料を確認しに向いたり、席の温まる暇のなかったことが思い出されました。

この展示では、「第1部 日本における美術書の流れ」と10社の企業からなる「第2部 美術情報とマルチメディア」の展示と二部構成になっていました。第1部は、「美術全集」からはじまって、雑誌・教科書・展覧会カタログ・美術参考図書に「アート・ドキュメンテーション関連文献」にいたるまで、さまざまな美術関連の資料を7章に構成し、その章立ての検討から、リストの作成、所蔵先の確認、借用の依頼、集荷、章解説のパネルやキャプションの作成、展示、そして撤収と、ほぼ一年の試行錯誤としんどさや楽しさの入り交じった不思議な労働の結果でした。わずか二日の展示期間ではありましたが、およそ700件の資料を集めて一堂に展示できたことは、資料提供や展示工作において多くの機関、個人からのご協力があった初めて可能であったと、あらためてお礼申し上げます。

地階展示場でこのような展示を行う一方で、上の講堂では、「美術情報と図書館」という統一テーマを掲げて、「アート・ドキュメンテーションの職能と教育」についての研究発表5件が第1日目の18日午後に行われ、翌日は午前10時半より夕方5時まで、「美術研究者と美術図書館員—電子時代の技能と領域」と題するオランダ王立図書館美術部長で国際図書館連盟〔IFLA〕美術図書館分科会前議長マギー・ウィスハウプト女史による講演、熊田淳美氏（当時、国立国会図書館副館長）による特別報告「マルチメディアと国立国会図書館関西館（仮称）構想」、そして高階秀爾氏（国立西洋美術館長）、上田修一氏（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科教授）、情報知識学会副会長でもある安澤秀一氏（駿河台大学文化情報学部長）をパネリストに迎えてのシンポジウム「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの—アート・ドキュメンテーションからの模索と展望」まで、多くの聴衆のご参加と熱心な質疑があったことを幸いに思っています。

このフォーラムは、1989年に発足したアート・ドキュメンテーション研究会の事業をふり返るとともに、約5年間にわたってこの研究会が提示することを試みてきた課題が、今後どのように展開されねばならないのか、あるいは軌道修正されねばならないのかを考える、貴重な「出来事」でありました。

また、フォーラムが終わって、数日後の勤労感謝の日に、オランダという山のない国からのゲストであるウィスハウプト夫妻とともに、奥多摩の御嶽山に遊んだことも、良き思い出に残るものでした。

とにかく大きなイベントをこなすと、一時、脱力状態にもなりますが、情報知識学会のニューズレターの編集担当者ともなっている千速敏男さんの陣頭指揮のもと、今回のフォーラムは一年を経ずして、189ページにおよぶ報告書となって記録されております（MacintoshのDTP機能の驚くべき力！）。ご希望の方は、定価2,500円ですが、委託販売元の日本図書館協会までお申し込み下さい。連絡先は下記の通りです。

〒154 東京都世田谷区太子堂1-1-10

日本図書館協会出版事業部

TEL: 03-3410-6415

FAX: 03-3421-7588

郵便振替: 00100-1-9375

さて、フォーラムというステップを踏んだ私どものアート・ドキュメンテーション研究会ですが、この一年近く、次に進むべき方向を模索しているというのが、正直なところですが。これまで通り、季刊の『通信』（現在27号まで）や年刊の『研究』（同じく4号まで）を刊行したり、下記の通り、年1回の総会を6月に開き、また見学会や研究集会も行っていますが、まだまだ、フォーラムでいただいたご意見・ご提言や幹事や会員が持ち帰った様々な反省を消化・吸収した上で、新たな展望を見いだすまでには至っていないようです。情報知識学会をはじめ、多くの組織や機関とも今後さらに連携させていただき、蜗牛の歩みであっても、少しずつ次なるフォーラム(?)へむけて力を注いでいきたいと思っています。

1995年度の主な活動

6月3日(土) 第6回総会 於: 東京都現代美術館

6月3日(土) 第19回研究会 於: 東京都現代美術館

佐藤寿子氏「東京都現代美術館における美術図書館の活動」

野崎たみ子氏「東京都現代美術館情報システムについて」

7月7日(金) 第9回見学会 於: 日本コダック株式会社

「Kodak Photo CDシステム」

7月22日(土) 第10回講演会 於: 東京都写真美術館

黒岩高明氏「映像資料のドキュメンテーション: 過去・現在・未来」

※以下、予定です。(10月29日現在)

11月25日(土) 第20回研究会 於: 立命館大学びわこ草津キャンパス

情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会と共催

「アート・ドキュメンテーションとコンピュータ」

米倉迪夫氏「アートドキュメンテーションの諸問題」

越智裕次郎氏「ロダン美術館(パリ)所蔵写真による画像データベース作成のための静岡県立美術館におけるシステム

坂井和美氏, 八村広三郎氏「マルチメディアによる地方中核都市における歴史・文化情報の発信:CD-ROMの作成」

江崎当平氏「アクロス福岡における文化情報システムの構築と問題点:ビデオオンデマンドによる検索システムの実現」

藤井浩美氏「A.T.E. (Art, Technology, Environment) プロジェクトにおけるネットワーク型ラボの試み」

上田修一氏, 神門典子氏「画像の認知の枠組みと索引法」

12月2日(土) 第21回研究会 於:慶應義塾大学三田校舎

美術情報をめぐって:会員相互の意見交換の場を作る試み(その1)

「問い合わせ先」

〒110 東京都台東区上野公園7-7

国立西洋美術館学芸課 波多野研究室内

アート・ドキュメンテーション研究会事務局

.....

フロッピー入稿

フリーライター／エディタ 杉山 肇

このニューズレターの編集を担当するC先生より、学術書の電子編集というテーマで一文を草すよう求められ、弱っている。私の場合、師匠（西洋美術史）の本の制作をお手伝いしているうちに、他の方のものについても校正・校閲の過程で多少の関与をするようになったというのが実状であり、かねてお世話になっている本物の「編集者」の皆さんに比べると、所詮、私などは素人に過ぎないからである。ただ、「本物」の皆さんに比べ、編集の過程でPCをコキつかうという点において、わずかながら、この学会に属する皆さんの関心を引く点もあるだろうか。すなわち、私が対象とするのは「フロッピー入稿」された原稿がほとんどであり、また経験上、数百頁単位の「書籍」に限られる。そして、その原稿は最終的に印刷会社の電算写植によって出力される。よって、このフロッピー入稿に関する一人の「電子編集者」の愚痴を聞いていただくのが、この稿の主旨となってしまうだろう。

フロッピー入稿がいつごろから始まったのか、正確なところは知らない。私自身の場合は1987年頃、フロッピーを出す側として初体験した覚えがある。そのときは何も考えずにプリントアウトと一緒にワープロ専用機のリデータ・フロッピーをお渡ししただけだったが、担当の方からその老舗の文科系出版社では初めてのケースであると伺った。しかし、ゲラを校正する際に、バケ字か誤植かはわからないが、とにかく原文と違う文字があったことは確かで、もしかしたらフロッピーは使いものにならず、印刷会社の方で打ち直されたのかもしれない。また、そのころ、とある大手出版社ではワープロでプリントアウトした原稿は不可だ、という噂話を感心しながら聴いたように記憶している（今でもリポート・卒論は手書き以外不可の方も……）ので、一応、一般化したと言えるのは80年代半ばであろうか。現在では、手書きの原稿を受け取らない出版社もあるようだが。

ところで、フロッピー入稿のメリットは、1) 誤植削減、2) 制作コストと期間の削減、の2点に尽きるということに、ご異論はないと思う。しかし、実際に「電子編集」をしてみると、本当にフロッピー入稿はメリットなのか、疑問に感じることがある。

ひとつ目をこらしてほしい。「フロッピー入稿」、これのおかしいところがおわかりだろうか。そう、長音符「ー」であるべきところに全角ハイフン「—」が使っているのだが、フロント・エンド・プロセサの仕様によるものか、多くの方が気づかないまま使っておられる。ところがこれを「ー」に一括置換をしてしまうと、今度は「プレトナーウッズ体制」とか「人間——このおかしなもの——」とか、かえっておかしくなってしまう場合も出てくるので、編集の際は全文にわたってひとつひとつチェックしなくてはならない。この二者は、見た目がほとんど変わらない書体もあるのだが、注意深い読者ならば気がつく程度に異なっているのが普通だし、縦組では、写植の仕様で、全角ハイフンは横を向いたままとなる場合が多い。ほうっておくわけにはいかない。しかも、両者混在の原稿であることも多いのだが、その修正作業は電子データ上で「検索」機能（できれば正規表現のオプションをつけた）を駆使すればこそできることで、ゲラになってから眼で追うとしたら、これはいささかきびしい。ちなみに、上例で使った倍角ダッシュは新聞等では「—」で代用しているが、書籍では「——」と一本の直線で表現される。しかし、これはプレーンなテキストには無い。だからフロッピーでは、ブランクもしくは「=」でも入れていただいて、プリントアウトに赤字で指示していただければありがたいのである。

もうひとつ「字下げ」の例を挙げてみよう。引用や箇条書きなどで行頭から連続して数文字分下げる場合があるが、1行目はよいとして2行目以降どのように書かれるだろうか。多くの方が、行頭からその何文字分かのブランクを入れることによって処理しておられるが、その場合の行頭が「論理行頭」ではなく「表示行頭」である場合には編集上非常にやっかいである。ワープロ原稿を写植に移す際、たとえ行あたりの文字数を出来上がりに合わせていただいたとしても、実際には詰めなどの問題でどうしてもずれてしまう。そして、この場合は本来「表示行頭」にあったはずのブランクもずれてしまうわけであって、「□□□」といったものが文中に挨拶もなくまぎれこむわけである。これも全体を精査して修正する必要がある。

またフロッピー入稿を採用すると、ハードウェア／ソフトウェア操作の問題ばかりでなく、書籍制作の進行も従来とは異なるはずである。できればメリットを生かして時間と手間を省きたい。と、わが国は言霊の国とて、初校を真っ赤にしなくては気が済まない方も少なくないのだが、確かに手書きの原稿では、これは致し方ない習慣であったと思う。手で書いた文字と、活字や写植文字では文章からうける印象がことなり、著者が意図しなかったニュアンスなども生じてしまう場合があるからである。しかし、このフロッピーでもたらされた電子原稿の場合も、それを編集し、こちらのワープロやDTPで仮にプリントアウトしてゲラとしてお返しすると、なぜか赤化義務を励行する方が少なくない。そして、この真っ赤なゲラを直すのも、編集者の仕事となってしまふ。それをやりとりした果てに、ようやく本文は固まったので写植に入れ、最後の念校を出したつもりでいると、いままでのパーソナル・コンピュータ用のプリンタの出力では「気分が出なかった」方もいて、また盛大に赤い花を咲かせてくれることも……

しかし、こういったことにとらわれていると、次第に電子編集は編集ではなく、単なる字面そろえに墮す傾向がある。体裁にとらわれ、内容のことなど、どこかに吹っ飛んでしまうのだ。実をいうと、大きな印刷会社さんとはともかく、中規模程度の頁ものの印刷屋さんでは、執筆者から直接フロッピーを貰っても、結局は、社内で再打ち込みさせる場合が多いのだそうである。電子データをいじっているよりも、プリントアウトしたものからプロが打ち込んだほうが、本1冊分であっても、早いという。そして、そんなことだけを編集者がやっているのだとしたら、これは無駄以外の何ものでもない。

思うに、総称としての「ワープロ」は、まだ揺籃期にあるといってもよいのではなからうか。たとえば、原稿をプレーンなテキスト・データでください、といっても、ローカルな機種／ソフト固有のデータを提出される方は多い。そして、そのフロッピーを何の機械で作って一体どんなデータを入れているのか、ラベルや付箋なども一切つけられていない場合がほとんどである。しかし、今現在「フロッピー入稿」をしている方々は、どのようにフロッピーの作成法を学ばれたかを考えると、やむを得ない、という気にもなる。私自身は大学生時代、自由選択科目で「電子計算機概論」の単位を取得したが、これはメインフレームでのプログラミングが主であった。その後学んだのは、自分で購入した、あるいは使用した、各マシン／各ソフトのマニュアルを中心とする知識である。しかし、これはローカルなものにすぎない。いわば、総論なしに各論の一部のみを勉強しているわけで、他の各論しか学んだことのない者と意思の疎通をはかろうとしても、うまくゆかないのは当たり前である。たとえば、体裁やJIS漢字水準外の文字などを表現するためにタグ付けを利用しようとしても、それは著者と編集が根気よく話し合い、データ制作手法についてのノウハウの共有を確認してからでないと、かえって混乱を招く結果となる。

だからいま、そういったローカルなものを超えた「統一基準」やノウハウの確立／体系化、

そして文筆にたずさわる人々の教育・再教育が必要だと思うのである。つい最近、日経MIXの某会議室で、JIS 漢字水準の選定基準や書体などについての話題が出て、この稿を書いている現在もスレッドは続いている。注意してみると、さまざまな分野の方が、いろいろなところで「規格化」に関心をもち、あるいは現にたずさわっておられるようである。それらが結集して、グローバルな規格として花開くことを心から期待したい。そしてその際、上例のような瑣末な、しかしある意味では真に基本的ともいうべきことどもに対する対応をも、忘れずに盛り込んでおいて欲しいと思うのである。

.....

【歴電】クロニクル 学術活動におけるパソコン通信の効用の一事例

成城大学 千速敏男

(E-mail: QZE17563@niftyserve.or.jp)

情報知識学会では、1995年度よりNIFTY-Serveの「歴史フォーラム (FREKI)」16番会議室「PRO/情報知識学会」を会員および会員外の皆さんの交流の場としてきました。1995年9月9日、10日に開催された第5回「歴史研究と電算機利用」ワークショップ(会議室での通称【歴電】)は、この会議室を十二分に活用し、成功をおさめた最初の研究集会だったと思います。そこで、私は当日の一参加者にすぎませんが、学術活動におけるパソコン通信の効用の事例として、NIFTY-Serve上において、どのように情報交換、意見交換がおこなわれたのかを紹介し、皆さんが今後のますます活用されることを呼びかけたいと思います。

コーディネータのお一人、児島秀樹さんから、今年の「歴史研究と電算機利用」ワークショップ(以下【歴電】)についての基本構想がアップロードされたのは、5月14日23時34分。会議室の7番目のメッセージでした。それに対して、わずか3時間後の5月15日2時43分、(豊後人)さん(注)からメッセージが届いています(#8)。まさにパソコン通信の速報性を印象づけるスタートでした。以後、5月下旬にかけて、ネットワーク、ハイパーテキスト、データベースと、【歴電】の基本テーマに関する意見交換がコーディネータの児島さん、神立孝一さん(ハンドル・ネーム〈かんち〉さん)、田良島哲さんを中心に交わされていきます(#9,11,12,13,14,19)。そして、6月10日、児島さんから【歴電】開催告知の第一報が発表されました(#29)。

その後、8月上旬になると、当日の発表予定者の皆さんの発表予稿が、コーディネータのお三方によって相次いでアップロードされます。おかげで、参加者の皆さんは、古瀬幸広さん(#37)、坂村健さん(#38)、家辺勝文さん(#42)、伊東宗裕さん(#43)、田良島哲さん(#44)、勘坂純市さん(#47)、安澤秀一さん(#48)の予稿を開催の1ヶ月も前に読むことが可能になりました。また、少なからぬ方々が、当日、この予稿をダウンロードしたものをご自分の携帯用コンピュータに収めて持参されていたのも印象的でした。つまり、私たちは、発表を聴きながら予稿のテキストを加工する自由を手にしたのです。

同じ8月上旬、【歴電】開催告知の第二報もアップロードされ(#49,50,51)、会員以外の方からの問い合わせが寄せられます(#45,46,54,55)。ここで注目したいのは、この【歴電】開催告知が転載自由とされた点です。私もそうでしたが、何人ものの方がお知り合いの皆さんに電子メールで転送することで、自発的に広報活動に参加されたことと思います。

さて、9月に入り、コーディネータとして準備に追われていた児島さんの基調報告の予稿もすべりこみ(#59)、いよいよ【歴電】本番です。当日は、古瀬さんが急病で欠席されるなどのアクシデントもありましたが、早朝からコーディネータの皆さんを中心に電子メールが交わされ、梶田明宏さんが原稿を代読することになりました。

こうして【歴電】本番は無事終了しましたが、むしろNIFTY-Serve上での議論はこれから始まります。9月10日深夜1時26分、【歴電】初日夜に開かれた懇親会から帰宅したばかりの児島さんから、はやくも意見交換の呼びかけがありました(#61)。

これを受けて私(千速)は、田良島さんの発表に関連して、史料の来歴について意見を述べました(#62)。この問題は、その後、田良島さん、児島さん、神立さんとの間で意見が交わされ、電子媒体による記録の来歴の問題に発展しました(#66,68,73,75)。

また、梶田さんから、電子媒体による文書のマークアップについて意見が寄せられました（＃63）。この問題は、家辺さんや田良島さんとの間で議論が進み（＃64,67）、さらに、当日は参加されなかった〈恭静〉さんから万葉集のSGML化に関して質問と意見が寄せられると（＃65,72,76）、児島さんも加わり（＃69,70）、大いに議論が盛り上がりました。

こうした一連の議論を受けて、児島さんから、基調報告の補足が寄せられました（＃74）。これもまたパソコン通信ならではのことでしょう。通常の人文科学系の学会口頭発表では、質疑応答の時間はわずか10分ほど。実質的な議論ができないままですべて終わってしまいます。パソコン通信のおかげで、より深い議論が可能になったのです。

さて、9月下旬から10月上旬にかけて、コーディネータの第一人、神立さんから、4回に分けて【歴電】レポートが寄せられ（＃77,84,85,97）、NIFTY-Serve上での議論はますます盛んになります。

その第1回は、児島さんの基調報告と伊東さんの発表についてでしたが（＃77）、古文書の特殊文字を電子媒体上でいかに処理するかという問題を中心に、児島さん、神立さん、小口雅史さん（当日の参加者）、伊東さんの間で意見が交わされました（＃78,79,80,81,82,83）。

続いて第2回と第3回のレポート（田良島さん、坂村さんの発表の分）が寄せられると（＃84,85）、いっそう話題が広がりました。絵や文字と多言語の問題、TRONとフォントの問題、さらには“諸橋大漢和”の問題と、児島さん、梶田さん、池田証寿さん、谷本玲代さん（ハンドル・ネーム〈でび〉さん）の間に活発に議論が交わされ、家辺さんからは国立国語研究所で公開シンポジウムが開催されるという関連情報が寄せられました（＃86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96）。池田さんや谷本さんは、当日は参加されていませんが、パソコン通信においては議論の展開の中で自由に発言することができたのです。また、話題そのものも、発言者の皆さんの関心に応じて豊かに発展していきました。

神立さんからのレポートの最終回（勘坂さん、安澤さん、家辺さんの分）が届いたのは、10月9日でした（＃97）。その後、家辺さんご自身からも発表報告が寄せられましたが（＃101,102）、残念ながら、実質的な意見は、安澤さんの松江藩財政分析に関する〈MUSE〉さんからのものだけにとどまりました（＃100）。【歴電】当日からちょうど1ヶ月。NIFTY-Serveにアクセスできる皆さんの間での意見交換がひとまとまり落ちついたということでしょうか。また、今回の議論に参加された皆さんが、「歴史フォーラム（FREKI）」18番会議室「歴史のコンピュータ活用」や、「シェアテキストフォーラム」19番会議室「国境を超えるテキスト」など、それぞれのホームグラウンドをもっていらっしやって、しだいにそちらに戻られたのも、一つの理由だろうと思います。

11月上旬、私がNIFTY-Serve上での【歴電】に関する意見交換のようすをニューズレターに紹介したいと申しあげ（＃104）、皆さんからの賛同と助言をいただいたところで（＃105以降）、5月14日の児島さんの最初の呼びかけ（＃7）から半年の長きにわたった【歴電】は、ひとまず終わったのかもしれませんが。けれども、ここでの活発な意見交換は、それに加わった皆さんの、そしてこの意見交換を熱心に読み続けたROM（READ ONLY MEMBER）の皆さんの中でさらに発展を続け、来年の第6回「歴史研究と電算機利用」ワークショップにつながっていくことと思います。

注：パソコン通信上では、このように本名ではなくハンドル・ネームという一種のペンネームを使っている方が少なくありません。本文ではハンドル・ネームは〈 〉で表記しました。

ニューズレター原稿募集(1994年4月更新)

1991年度より情報知識学会のニューズレターの発行が年6回になり、鮮度の高いニュースを掲載すべく努力しております。

つきましては、会員の皆様の原稿を募集します。内容は自由自在、"情報"を題材にしたものから、"情報"に関連のないものまで、特に指定はありません。

第33号からTEXによる編集を行っておりますので、下記の形態でお送りいただければ助かります。

- ・E-mail(通常のテキスト形式)
- ・floppy disk(ASCIIテキスト形式、またはASCII TEX ファイル)
2HD(IBM format 1.44MB)、または2DD(720KB)

E-mailの場合には出力原稿をFAX(A4)で、floppy diskの場合には、出力原稿そのものを同封してお送りください。

原稿の長さは、1600字／1頁換算で、1～4頁の範囲であれば、ご自由です。なお、表、図、イメージも受け付けますが、いずれもbitmap, TIFFなどの一般的なイメージフォーマットに限ります。

これまで通り、以下の記事は常時募集します。執筆ご希望、またはどなたか推薦したい方などご紹介ください。

研究紹介、人物紹介
会員の随想、書評
学会のニュース、カレンダー
対談記事・インタビュー
関連学会の開催案内、国際会議紹介
大学・研究所等の研究室紹介
情報関連商品、ソフトウェア紹介
その他、ミニ情報

*** 執筆者は会員に限ります。ご了承ください。

*** 法人会員の広告も掲載いたします。事務局にお問い合わせください。

*** 〆切日はありませんが、掲載される号については、投稿時の原稿の収集状況に依存しますので、投稿時の次の号に掲載されるとは限りません。ご了承ください。

原稿送付先

〒259-12 平塚市土屋2946
神奈川大学 理学部 情報科学科
後 藤 智 範
TEL: 0463-59-4111, FAX: 0463-58-9684
E-MAIL: gotoh@info.kanagawa-u.ac.jp

■前号記事の訂正

前号(34号、1995年10月1日発行)に掲載されました木下達文氏のご論考「ミュージアムにおけるインターネット利用—その展望と課題—」に脱字がございましたので、下記のように訂正します。木下達文氏をはじめ読者の皆様方には、編集担当一同、心よりお詫び申し上げます。

前号12ページ 「2 国内におけるこれまでのミュージアムネットワーク」の5行目より8行目まで、

正 (a) 人的ネットワーク(人の交流—派遣みたいなものも含まれる)、(b) 資料ネットワーク(いわゆる特別展などで行われる実物資料の交換や、出版資料の交換などを意味する)、(c) 情報ネットワーク(これがコンピュータネットワーク)である。ここで取り上げたいのは(c)であるが、(a)と(b)もこれまでの議論に含まれていたことを留意しなくてはならない。

.....

■編集後記

今回は、諸処の事情により原稿の収集、発送が予定よりだいぶ遅れてしまいました。会員の皆様には心よりお詫び申し上げます。

編集委員長 後 藤 智 範

.....

■複写をされる方に

R <学協会著作権協議会委託>

日本国内における、当ニューズレターからの複写許諾は、学協会著作権協議会から得てください。

学協会著作権協議会

〒107 東京都港区赤坂9-6-41

TEL:03-3474-4621, FAX:03-3403-1738

アメリカ合衆国における複写については、Copyright Clearance Center, Inc. から得てください。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA. 01923, USA

TEL: 508-750-8400, FAX: 508-750-4744